平成３０年度研究主題

考えを広げ、深める児童の育成
～説明的文章の指導を通して～

〈第６学年分科会〉

〇第６学年で目指す児童像

（広げる）進んで関わり合い、多様な考えに気付いたり、自分の考えに結び付けたりして理解したりする。
（深める）友達の考えを生かして、根拠をもって、自分の考えを確かにしようとする。

〇全体会授業　７月１１日（水）５校時

教科・単元　国語科「筆者の主張をとらえ、根拠となる事例を考えよう。」

教材名「感情」（光村図書６年）

単元の目標　・筆者の主張と事例などの関係をおさえ、主張にふさわしい事例を考えることができる。
・筆者の主張を捉えながら、事例の妥当性に対する自分の考えを明確にして読むことができる。

研究主題に迫るための４つの視点

視点１「単元展開の工夫」

２学期に「未来がよりよくあるために」という「どうすれば読み手に説得力をもって自分の意見を伝えられるか」を意識して、説得力のある文章を書く力を育てることを目標とした単元がある。そこで、今回「感情」を読み、筆者の主張の根拠足りうる事例を考える学習を行うことで、２学期の学習につなげるとともに、この学習のつながりを児童に意識させることで、学習への関心意欲を高められると考えた。

こうした手立てにより、児童によっては課題意識をもって取り組む姿が見られたが、２学期の学習の際に、学習のつながりを意識しているか確認したい。

視点２「考えの広がり、深まりを促すための指導の工夫」

教師が範読する際に、一文ずつ区切って読み、その都度「確かにそうだ」「どうして」など短い感想を言わせる機会を作ることで、自分の考えをもとうとする態度を養えると考えた。この手立てにより、児童の理解を促すことができた。

教材文の工夫として、①２つの事例を省いた４段落構成の文、②２つめの事例を省いた５段落構成の文、の２つの文と、２つめの事例として４種類の文（A 筆者の主張とずれたもの、B 具体性に欠ける、C 原文のまま、エ一般的でない）を用意し、比較させたり、選択させたりした。こうした手立てにより、多くの児童が事例の必要性や妥当性に対する考えをもち、交流の中で広げ、深めることができた。

視点３「評価の工夫」

課題に対して、まずは自分一人で取り組み、考えを書かせ、その隣に友達との協働学習後に改めて考えを書く欄を設けたまた、意識調査で自己評価の数値が低かった項目を中心に、評価項目を作成し、毎授業後に学習の振り返りとして自己評価させることとした。

こうした手立てにより、児童が学習のめあてをもつことができ、見通しをもって学習に取り組むことができた。

視点４「個に応じた手立て」

ポイントを事例ごとに示したことで、視覚的に分かりやすかった。その一方で、プレゼンの字体を UD 体やメイリオなど配慮したり、「最後まで書けなくてもよい」など、見通しをもたせられるとよかった。

成果（〇）と課題（●）

〇事例として複数パターンを示し、選択させたことで、ふさわしい事例とは何かを理解させることができていた。その結果、ほとんどの児童が最終的に事例を書くことができていた。

●後悔の事例と似たような事例を書いた児童もいたことから、「〇〇さんに向けて書こう」など、伝える対象をはっきりさせたほうが、児童も書きやすかったと考える。